川端康成『千羽鶴』論

――〈幕〉の解釈と〈幸福〉の希求――

原　佑　美　子

はじめに

『千羽鶴』は「読物時事別冊」第三号（一九四九（昭和二四）年）他、様々な雑誌に短編連作された川端康成の小説である。また、「千羽鶴」の続編として「波千鳥」が「小説新潮」第七巻第五号（一九五三（昭和二八）年）から同誌第八巻第九号（一九五四（昭和二九）年）まで、同じく短編連作の形で発表されたが、作者によって末尾の二篇「春の目」「妻の思ひ」が削除され、未完中絶の作品となった。そのため作品の知名度は低いが、『千羽鶴』の先行研究においては「波千鳥」までを含めて一続きの物語として論じられることが多く、欠かせないものとなっている。本論文でも「波千鳥」を含めて論じる。

管見によれば、これまで『千羽鶴』は「因縁の呪縛からの解放」「罪や汚濁の意識からの浄化」の物語と捉えられることが多かった。[一]また、太田夫人は「魔性の女」「背徳的な女」と呼ばれ、菊治もまた背徳耽美に耽る男と評されたこともある。論考によっては、登場人物たちが背徳的な行動を無意志に繰り返しているとして批判的に捉えられたこともあった。[二]また批判的でない論文にも登場人物を耽美的かつ没倫理的性向の持ち主として論じるものがある。上坂信男による論は、作品の「没倫理性」を人間の「内なる自然に忠実であろうとする生き方であり、考え方」だとして、「不倫背徳の名の下で、偏見をもって遇されて来た人間性の一面として、没倫理を正当に位置づけようと『千羽鶴』は執筆された」としており、筆者も首肯できる部分が多い。[三]しかし「没倫理の人」とされた菊治や太田夫人はやはり「享楽的」「性欲の虜」「背徳耽美の人」と表現されている。本論文では「背徳的」との見方をされてきた登場人物のたどった心的過程をより詳細に読み解き、その人間性、ひいては物語のメッセージを捉え直すことを目指した。

本論文では作品に主人公菊治の〈幸福〉の希求のテーマを読み取ることができることを指摘し、汚濁からの単純な浄化ではなく、一見汚濁と見られるものの中に自らの〈自然〉とその実現による〈幸福〉を見出してしまったことにより、現世的な倫理観と自己の〈幸福〉希求とのはざまでもがき苦しむ主人公像を読み取った。

こうした読解の上で重要なのが、作中の〈幕〉という言葉の解釈である。これまで〈幕〉について言及されたことは多くなく、原善の論文がその数少ない例として挙げられる。[四]本論文では先行研究とは異なった〈幕〉の解釈を試み、それをもとに菊治の〈幸福〉希求の物語として作品全体を捉えたとき、本篇「千羽鶴」と続篇「波千鳥」はどのような意味合いを持つのかを中心に考察した。またそれとともに、登場人物のたどった心的過程を詳細に読み解き、記述した点に一定の成果があると考える。

本文で使用する川端康成のテクストはすべて『川端康成全集』（新潮社刊）所収のものを使用する。引用文に示したページ数はその作品の含まれる全集の当該巻のものである。

一　〈幸福〉希求の物語

本節では、『千羽鶴』が〈幸福〉希求の物語として読めることを指摘し、主人公菊治の〈幸福〉希求がどのように展開しているのかを論じる。なお本節は第二節以降の内容の前提となるものであり、別稿において詳細に記述した内容を簡略にまとめたものである。そのため、説明に不十分な点があることをお断りしておく。

菊治は物語現在において二六～二八歳で、四年前に父を、それから母を亡くし、天涯孤独の身となった。菊治の父は栗本ちか子、後には太田夫人と不倫しており、表面的には穏やかな家族だったが、内部には亀裂が入っていた。菊治は自らの生に対し、信頼と愛情に基づいた〈家族〉の中で育まれたそれとは明らかに異端のものであるという意識が自覚的でなくともある。菊治は見合い相手である稲村ゆき子と「正常」な〈家族〉の〈形〉を新しくつくることによって〈家族〉の〈幸福〉を手に入れようとしていたことが読み取れる。このように、『千羽鶴』は菊治の〈幸福〉希求の物語として読み進めることができるのである。

しかし菊治は〈家族〉の〈幸福〉を希求する一方で、求めていた〈形〉とは対極の位置に〈幸福〉を見出してしまう。菊治は〈父〉に対して、それまでは自分の〈家族〉に暗い影を落としたという一方的な悪感情を抱いていたが、父の愛人だった太田夫人と関係してしまったことによって、〈父〉の不潔が「自分にもつながってくる」ものとして意識されるようになる。さらに菊治には、夫人に愛されていた父の〈幸福〉を自分のものとしても感じるというプラスの意識が芽生える。菊治は不義のまつわらない〈幸福〉のために「倫理」的に正しい〈家族〉の〈形〉を求め、その根源である「破倫」の〈父の因縁〉から脱出しようとする一方で、父と同じ「破倫」の愛の中に〈幸福〉を見出し、自己の内面における新たな価値として発見するのである。しかし「倫理」の象徴であるゆき子の存在を思うと、菊治は太田夫人の愛情に〈幸福〉を見出す気持ちと、自分の〈家族〉に暗い影を落とした〈父〉の不義、またそれを自分にも引き継がれるものとしてしまったことへの嫌悪という両面の感情の間で揺れ動いてしまう。

菊治が見出した新たな〈幸福〉は、作中の〈別の世界〉、〈自

然〉といったキーワードから明らかになる。菊治が太田夫人と出会い、父の〈幸福〉を自分のものとして感じるとき、二人は〈別の世界〉と呼ばれる世界に入り込んでいる。〈別の世界〉は、父親と息子、母親と娘という「境界線」―存在形式―を取り払ったところにある「本質的なもの」を顕現させる場所である。夫人は交情の相手に対して父・息子といった「枠組み」―「菊治はかつての愛人の息子である」という認識―を取り払って結びつくが、それは菊治にしても同様である。〈現実世界〉が「枠組み」や「境界」によってはっきり分割される世界だとすれば、〈別の世界〉はそうした「枠組み」を取り払ったところにある、人間がその本質のままに存在する世界なのである。

また作中で〈別の世界〉が描かれるとき、こうした「素直に誘ひ寄せられる」という性質に近い意味で〈自然〉という言葉が用いられていると思われる。〈自然〉は、菊治が太田夫人やその娘文子と結び付くときの様子を表現するときに繰り返し用いられる言葉である。〈別の世界〉は人間の〈自然〉を実現する場所として描かれており、菊治はその愛の中に〈幸福〉を見出している。そして一度それを体験した彼はその〈幸福〉に惹きつけられてやまない。なお本論文では、〈別の世界〉において菊治と太田夫人や文子とのあいだに存在した「愛」を〈無垢の愛〉という造語を用いて呼んでいく。

このように〈現実世界〉と〈別の世界〉を対比的に捉えることは、読者に〈現実世界〉の考え方を相対化する視座を提供する。それは、「倫理」や「道徳」は〈現実世界〉でだけ通用する〈人為〉的な「枠組み」である、という観点である。〈現実世界〉で暮らす人間の認識は全て、「常識」や決まりきった「枠組み」を善悪の判断基準とし、しかもそれがそもそも人間の定めた「枠組み」であることすら普段は忘れてしまっている。〈現実世界〉が道徳・倫理、父・息子の別など、人間の定めた―〈人為〉的な―「枠組み」や「境界線」によって分割される世界であるとすれば、〈別の世界〉は〈現実世界〉の「枠組み」を取り払った先にある世界なのである。

ここで論じた段階での菊治は、太田夫人とともに〈別の世界〉に入り込むことで見出した新たな〈幸福〉に蠱惑を感じつつも、ゆき子に象徴される「倫理」に揺り戻しをかけられ、その〈幸福〉への価値観がまだ確固たるものになっていない状態である。言い換えれば、菊治は自分にとっての〈幸福〉とはどのようなものであるのか、いまだ無自覚な状態である。しかし第三章「絵志野」において「相対的なものの見方」が菊治自身に獲得されることにより〈幸福〉希求の物語は進行する。『千羽鶴』は〈幸福〉希求の物語として読むことができるとしたが、それは〈幸福〉の〈形〉を整えることをゴールとしたものではなく、そこを起点として真実の〈幸福〉とは何かを見定める過程を描いた物語だと考えられるのである。その「相対的なものの見方」の獲得が菊治にどのようにしてもたらされたかは、次節で論じていく。

二　〈幸福〉観の転換

本節では「千羽鶴」前半の文子の言動、特に「太田夫人の死」を挟んでのその変化を追うことで、それが菊治の〈幸福〉希求にどのように影響しているのかを考察する。また文子と菊治の生き方を明確にするとともに、〈幕〉という言葉の意味を考察する。

文子は「現世的倫理」に基づいた行動をとる存在として登場する。物語の冒頭、円覚寺の茶会で太田夫人と菊治が向かい合って座り、自分の愛情のままに菊治の父を懐かしむ夫人の横で、そのはずかしさにじっと耐えている（p.二〇、p.二五）。しかし、夫人の性格に対して一方的な解釈をしたり、無理解であったりするわけではなく、母の性質は理解した上で、母の行為が実社会の常識にそぐわないこともわきまえているのである。

太田夫人の娘である文子は「長めな首」「円い肩」など、夫人の身体的特徴を受け継いではいるが、「口は母親より大きく、固く閉ぢて」いるなど、母親とは違う性質を持っていることが外見的な特徴にも表れている（p.二一）。菊治は文子に太田夫人の影を見、その内奥に「素直」に引き寄せられる「何か」を感じているが、文子は太田夫人の全くのコピーではないのである。

ところで、文子の「母（以下、太田夫人）への理解」はその死の前後を挟んで変化する。太田夫人の死後、菊治は太田家に文子を訪ねて行き、「母が死んだ翌日から、私は母をだんだん美しく考へるやうになりましたの。（p.八一）」と告げる。それまで母の性質をはずかしいものと考え、菊治のもとを訪れて母の行動の弁解をしていたのに、夫人の死後、文子の中で母の性質への認識が変化したのである。では、それはどのように変化したのか。太田夫人が死ぬ前と死んだあとの文子の台詞のなかから、「ゆるす」という言葉の意味の変化を追うことによって考察する。

①夫人の死の前

「母をゆるしてやつていただきたいんですの。」

と、令嬢はまた必死に訴へるやうに言つた。（中略）

「母が悪いんですわ。母はだめな人ですから、ほつといていただきたいんですの。もうおかまひにならないで。」

令嬢は早口に声をふるはせた。

「お願ひです。」

ゆるしてといふ令嬢の言葉が、菊治は分った。母をかまつてくれるなといふ意味も含まつてゐるのだつた。（p.三九）

②夫人の死後

「母は自分で死んだのですわ。私はさう思つてをります。母がなくなつてから、一週間、私ひとりで考へてましたのよ。」（中略）

「・・・はたの者が責任を感じたり、後悔したりしては、母の死が暗いものになりますし、不純なものになりますわ。後に残ったものの反省や後悔は、死んだ人の重荷になりさうに思ひますの。」（中略）

「死んだ人はゆるしてさへいただければ、それだけでいいと思ひますの。母もゆるしてもらひたくて、死んだのかもしれませんわ。母をゆるしてやつていただけますの？」（pp.七六～七七）

①では、文子は母の性質を「悪い」「だめな人」と、情けない気持ちを持って嘆いている。ここでの「ゆるす」の意味は、夫人は自分の愛情を止めることができない人だから、これ以上逸脱行動を重ねないためにもう夫人に関わらないでくれ、という意味である。

一方、夫人の死後である②での「ゆるす」の意味はどうか。ここで言われている「後に残ったものの反省や後悔」とは、死者が望んだものではなく、生きているものの一方的な考え方である。文子は、母の死が生きているものに一方的に反省や後悔をされたり、マイナスの意味付けをされたりする性質のものではないと言っているのである。言い換えれば、文子は夫人の死を肯定的に理解しているのである。従ってここでの「ゆるす」は、菊治にも自分がするように母を理解してほしいという意味である。

太田夫人は、菊治との二度目の逢瀬のとき、「ああ、死にたい。死にたいわ。今死ねたら、どんなにしあはせでせう。」（p.六五）と言う。このように、太田夫人は、自ら進んで「死の世界」に行きたがっている。夫人の言う「今」とは、自らの〈自然〉を実現できる世界、すなわち〈無垢の愛〉の実現する〈別の世界〉にいる「今」のことを指す。太田夫人は〈現実世界〉における「枠組み」の中では、〈自然〉のままに愛情を実現させることができない。この世界で惹かれた相手は、たまたま惹かれてはならない相手だったからである。太田夫人が自分の〈無垢の愛〉に正直にいる、つまり〈現実世界〉の倫理・道徳といった「枠組み」から逃れるためには、「死の世界」に行くしかない。ここで、「死の世界」と〈別の世界〉はつながってくるのである。

「現世的倫理」に基づく文子の立場から理解すれば、不倫の関係を重ねてしまう「自分の醜さにたへられ」ずに自殺したように見える太田夫人の死は暗いものとして認識されそうである。しかし、「はたの者（生きている者）の感じる責任」や「後悔」、あるいは死にまつわる「暗さ」「醜さ」は、〈現実世界〉における倫理・道徳に照らし合わせるからこそ出現するのである。つまり、夫人が自分の〈無垢の愛〉に正直にいるために〈現実世界〉から脱出し、「死の世界」＝〈別の世界〉に旅立ったのだと「はたの者」が前向きに捉えれば、夫人の死には決して暗さは伴わないのである。文子の言う「美しさ」とは、太田夫人が自分の〈無垢の愛〉に忠実にいるために「死の世界」へ向かったという純粋過ぎる行動のことなのである。太田夫人の死を前向きに捉えることが「美しく考へる」ことであり、これが母を愛する文子の行きついた「母の死への理解」なのである。

ところで菊治は、②の文子の言葉で「頭のなかの幕が一枚落ちたやうな」（p.七七）気持ちになる。また「太田夫人にこの文子といふ娘がなかつたら、夫人とのことでもつと暗くゆがんだ思ひにとざされてゐたかもしれなかつた」（pp.八一～八二）とも思う。この〈幕〉とは一体何を表しているのだろうか。

〈幕〉という言葉は、物語のなかに三箇所、合計四回登場している。以下登場する順に記述する。

一箇所目

しかし、菊治は暗く醜い幕につつまれてゐると思へてならなかつた。

今日になつてもその幕は取れない。(p.五六)

二箇所目

菊治は文子の言葉で、頭のなかの幕が一枚落ちたやうな気がした。(p.七七)

三箇所目

長いあひだの暗く醜い幕の外に、菊治は出られた。(p.一四九)

一箇所目は、父がしたと同じように太田夫人と関係した菊治が自らの行為を「現世的倫理」から見て汚濁のものと感じ、「菊治自身のうちに不潔」があり、「ちか子の胸のあざに、よごれた歯で噛みついてゐる父」の「姿が自分にもつながつて来る」という思いをしている場面である(pp.五六～五七)。

二箇所目は、太田夫人の死後、菊治が太田家を訪れた場面である。

三箇所目は、菊治が文子と交わり、文子が志野の茶碗をわって菊治の家から去った後の場面である。

これまでの研究ではこの〈幕〉について言及されたことはあまり多くなかった。原善の論文はその数少ない例だが、〈幕〉を「太田夫人と関係する以前から菊治を呪縛していた、父にまつわる過去からの悪因縁である。菊治の内部に因縁へのこだわりが巣喰っていること、彼が何らかの浄化を得るのは、そうした因縁への囚われから解かれるときなのだ」とする。つまり〈幕〉は菊治につきまとう「因縁の呪縛」であり、「除幕」によって菊治は悪因縁からの浄化を得られたと論じている。五

しかし本論文では先述した〈現実世界〉と〈別の世界〉の対比を踏まえ、先行研究とは異なった解釈を試みる。以下で〈幕〉の意味を考察する。一箇所目で菊治が「つつまれてゐ」た「暗く醜い」〈幕〉に変化が起きるのは、二箇所目と三箇所目である。そしてその両方ともに文子が関わっている。まず二箇所目で「〈幕〉が一枚落ち」るのだが、これは菊治のなかである価値観の転換が起こったことを示していると考えられる。ここで〈幕〉の意味をその既存の「価値観」であるとする仮説を立ててみる。菊治は〈無垢の愛〉を実現するために「死の世界」へと離脱していった太田夫人を「美しく考へる」という文子の理解を示されることにより、太田夫人の死にまつわる暗さや醜さを払拭することができた。それと同時に、太田夫人と父、そして自分との恋愛を「破倫」と位置付ける〈現実世界〉の倫理観、すなわち「現世的倫理」を相対化する視点を得たと考えられる。つまり「倫理」は、現実の社会を破綻なく動かすために〈人為〉的に作られた現世的な価値観であり、倫理的に「正しい」婚姻という〈形〉も現世的な価値観でしかない。〈別の世界〉の価

値観から捉えれば、現世的に「破倫」とされる菊治たちの行為も「汚濁」ではなくなる。それどころか〈無垢の愛〉を実現しているという意味で、却って価値ある〈幸福〉を見出すことができているといえるのである。このように理解していくと、その「価値観」とは〈現実世界〉だけで通用する価値観、すなわち「現世的価値観」であり、〈幕〉は「現世的価値観」のフィルターを象徴していると考えられるのである。しかし、文子の言葉によっては〈幕〉が「一枚」落ちただけである。つまり〈幕〉は完全に消えてしまったわけではなく、依然として存在している。それはまだ現世的なものの見方が完全には消え去っていないからである。だから「幕が一枚」落ちた後でも、菊治は「道徳的な苛責」を味わうことがある（p.九三）。

このことを踏まえて、三箇所目の〈幕〉について考察する。ここで菊治は〈幕〉の外に出るのだが、それは文子と交わり、彼女が菊治にとって「比較のない絶対」だと確信したときのことである。その部分を以下に引用する。

長いあひだの暗く醜い幕の外に、菊治は出られた。
文子の純潔のいたみが、菊治を救ひ上げたのだらうか。
文子の抵抗はなく、純潔そのものの抵抗があつただけであつた。
それこそ呪縛と麻痺との底に落ちたと思はれさうなものだが、菊治は逆に呪縛と麻痺とをのがれたと感じた。中毒してゐた毒薬を極量服毒して、それが解毒となつた奇蹟のやうだ。（p.一四九）

〈幕〉の外、つまり「現世的価値観」のフィルターの「外」に「出られた」菊治は、「現世的倫理」から見れば「呪縛と麻痺との底に落ちたと思はれさうなもの」―親子二代に亘って「破倫」の関係を続けてしまったから―である。しかし菊治にしてみれば、文子とともに〈別の世界〉に入り込むことで〈無垢の愛〉を感じ、そこに真の〈幸福〉があることを確信したと考えられるのである。「呪縛と麻痺」と見えていたものは、実は「現世的価値観」にがんじがらめになって真実の〈幸福〉を認識することができなかったこれまでの自分の意識であり、菊治はそれを「のがれた」。文子と交わることは、二箇所目に文子の「言葉」で「幕が一枚落ちた」際はまだ不安定なものであった〈幸福〉の認識を、菊治の中で確固たるものにしたのである。文子の中には太田夫人と同じように菊治が本質的に引き寄せられる「何か」が存在しており、菊治は「素直に誘ひ寄せられる」（p.八〇）。そしてやはり文子は夫人と同じく自己の〈自然〉を実現できる相手であったのである。

〈幕〉の「外」に出た後はすでに「現世的価値観」を超脱しているので、その後の菊治は太田夫人と同じように〈自然〉を実現できる文子を求める気持ちを募らせていくことになる。しかし、〈幕〉はその全てが「落ちた」のではない。菊治は〈幕〉の「外」に「出られた」というだけで、〈幕〉そのものは依然として存在しているのである。

文子は菊治と関わることで、二度にわたって彼をつつんでいた〈幕〉に影響を与え、最終的に彼を〈幕〉の外に出し、真実の〈幸福〉を認識させる。この観点から、物語において文子は

菊治に〈幸福〉の内実を気づかせる役割を担っているといえる。菊治の〈幸福〉希求の物語として「千羽鶴」「波千鳥」を捉えたとき、本篇「千羽鶴」は菊治が「現世的価値観」のフィルターを取り払い、真の〈幸福〉の姿を「認識」する過程であると考えることができる。

三　「追体験」後の意識の相違

本節では前節に引き続いて文子の言動を追い、彼女の生き方の特質を考察する。またそれによって相対的に菊治の生き方、ひいては彼の〈幸福〉希求のありようの特質を明らかにする。物語の主人公は菊治であるが、文子の思いの変遷をたどる物語でもあり、「波千鳥」の「手紙」の挿入はその要素を一層強くさせる。「手紙」の物語言説を時間軸に沿って並べ替えると、実は文子に関するエピソードは物語内容の時間のほぼ最初から登場し、文子は主人公菊治と時間的に併走する形で、物語時間全体を貫いて行動していることがわかる。「千羽鶴」と「波千鳥」を一続きの物語として考えたとき、文子の「手紙」は後説的にもう一人の主人公を構築するものなのである。また「手紙」は、菊治と文子の共通性を読者に認識させる効果を持つ。先行研究でも、菊治と文子は、不義の相手同士の親の一人っ子で、それぞれ自分の親の不義相手に強く惹かれるなど、多くの点で共通点を持っていることが指摘されている。[六]しかしその後の二人の生き方は異なったものになっていく。「波千鳥」の「手紙」によって文子の内面が詳細に描かれ、彼女の存在感は濃厚なものになってゆくが、そのことによって同じ運命にある菊治の生き方の特質が一層浮き彫りにされるのである。

「千羽鶴」の時間における文子の内面は「手紙」の詳細な記述によって再構成できる。まず「千羽鶴」の後半の文子の内面について分析する。第三章「絵志野」は、文子に主眼を据えると「太田夫人の死の意味を解釈する」章であり、文子の言葉を借りれば「ものに憑かれて」いる状態である。第四章「母の口紅」の段階でも依然その状態であり、ちか子の露骨な侮辱に対して反発しない文子の様子が繰り返し描かれている。しかしこのときの文子は「現世的倫理」観を失い、太田夫人の「破倫」の行為を正当化しようとしているのではない。文子は太田夫人の生き方（死に方）を〈無垢の愛〉に忠実に生きたというように前向きに捉え、他人が何を言おうと意に介そうとせず、毅然とした態度をとっているのである。

次に「千羽鶴」の末尾、文子が志野の湯呑をわる場面を取り上げ、文子が「ものに憑かれている」ときの実態をさらに深く考察する。「母を美しく考えようとする」文子は志野をわったとき、「太田夫人の形見、それによつて菊治が夫人や文子を思ひ出す、あるひはもつと親しく触れるやうに思ふ品は、最高の物であつてほしい」（p.一八六）と、その「ひと」を菊治に限ってそう思った。文子は後になってこそ、「あのころ」は「ものに憑かれ」ていたようだったと思うが、そのときは「ひたすら母を美しくしたい」一念であった（p.一八六）。つまり死へ向かった母のあり方を肯定的に捉えることに夢中になっていた。その思い決めた様子のあまりの必死さが、のちに文子自身

によって「ものに憑かれたやうな心」と形容されたのである。そしてその心が、それを見ることによって菊治が夫人や文子を思い出すことになる形見は他に比類のない、最高の品物であってほしいとの願いとして表れたのである。文子は「ものに憑かれた」ように「母を美しく考える」ことに徹し、その思いの集大成として志野をわった。文子も菊治と交わったとき、文子も〈別の世界〉に入り込み、母の感じていた〈無垢の愛〉の喜びを味わった。そして愛に徹した母の「美しさ」の象徴として、「最高の名品」である志野の水指だけを残すために、「あまりよい品物ではない」湯呑をわったのだと考えられる。志野をわってしまうまでは、まだ「ものに憑かれた」、つまり母を美しく考えることに徹していた状態だったのだ。文子が自分も菊治を愛しているとはっきりと認識したのは、関係を持ち志野をわった直後である。しかし志野をわることは、同時にその「愛」を「現世的倫理」の立場から「罪」であり、「ただ一度」で断ち切られるべきものとして認識させる出来事でもあった。その罪の意識は太田夫人と同様、文子にも「死」を意識させる（p.一九〇）。また、文子の太田夫人の死への解釈にも、菊治と交わってしまったことをきっかけに変化が起こる。菊治における〈父〉の「追体験」のときと同じように、母の性（さが）は自分にも引き継がれるものとして文子に〈因縁〉として意識化されるのである。

次に、「波千鳥」の「手紙」の文子像について考察する。手紙は第六信まであるが、情景描写の分量はそれぞれの手紙によって異なる。第一日目～三日目の手紙は、四日目以降と比べると情景描写の分量は少ない。文子は外界のことを語るよりも、自分の内なる世界にひきこもり、とりとめのない思いにふけっている。しかし四日目～六日目は一～三日目と比べ、情景描写が格段に増加しているのに加え、文子の心情は大分の風土や出会った人々と関わるなかで大きく変化していく。文子は最初、自分が何のために見も知らない父の故郷へ帰っていくのか分からずにいた。しかし四日目、文子は菊治を思い、そして別れるために旅してきたのだ（p.二〇四）とその意味を見出すのである。

文子は菊治を愛していることには変わりないが、自分たち母子の行動を「罪」と捉えてしまった以上、これ以上罪を重ねないためにも菊治との完全なる断絶が必要であった。太田夫人もおそらく〈別の世界〉に入り込んでいないときは罪の意識にさいなまれていたと考えられ、最終的には「死」を選んだ。一方文子は母と同じ行動をし、同じ気持ちを味わうが、罪の意識を感じながらも「生」きることを決めた。自分たち母子は、確かに「現世的倫理」からは「罪」と捉えられるようなことを犯した。しかし、父の故郷で「病的な思ひ」（p.二〇一）を洗った文子は、それら「汚辱」や「罪業」の間にも「救いの場所」はあるのだろう、と考える。文子の旅の意味は文子なりの「清算」であった。しかし死をもって「清算」した母とは違い、それは現世で「生きていく」ことをもってのものであった。

このように、菊治と文子は互いの父母を「追体験」し、また〈別の世界〉に入り込んで〈無垢の愛〉を実現させる。この点でも二人は相似の関係にあるといえる。しかし彼らの間には「追体験」後の意識の上で大きな相違がある。菊治は父の感じ

ていた愛の〈幸福〉を自分のものとして感じ、太田夫人、そして文子を求めるが、文子は罪の意識を身に負って遁走する。文子の中で「現世的倫理」と自らの〈自然〉が両立しないという前提は揺らぐことはなく、再び菊治を求めることはなかった。つまりある行動を通して親からの〈因縁〉を「自分のものとして」意識化したとき、その内実に価値を見出し〈幸福〉として認識するか、それとも「現世的倫理」からそれを罪悪視するかの相違が、二人の間にはあるといえる。

四　〈形〉ある〈幸福〉、〈形〉なき〈幸福〉

本節では「千羽鶴」と「波千鳥」の世界を対比的に捉えることで、「千羽鶴」から「波千鳥」に至る流れのなかで菊治の〈幸福〉希求がどのように展開されているのかを考察する。

本篇・続篇二つの物語世界は様々な側面から対照的に捉えることができる。例えば「千羽鶴」に比べ「波千鳥」の描写、とりわけ情景描写が具体的で詳しいことから、描写の面で「抽象」と「具象」の対比として捉えることができる。内容においても、「千羽鶴」では〈現実世界〉で生きていた菊治が、それまでの価値観をゆるがされて戸惑い苦しむ姿が描かれていたのに対して、「波千鳥」では菊治が価値観の転換を経たがゆえに感じる、〈現実世界〉で生きる苦しみが描かれている。〈別の世界〉（＝〈自然〉の世界）が描きこまれた「千羽鶴」に対して、「波千鳥」は〈現実世界〉（＝〈人為〉の世界）を主に描いているのである。

「抽象」から「具象」への変化は、なかでもゆき子の描写の変化に顕著である。「千羽鶴」のゆき子は、「光」や「印象」、「香り」といった、〈形〉をはっきり捉えることのできないもので表現されている。しかし「波千鳥」では太田夫人や文子と同じく肉体的特徴（「黒子」や「歯」など）が描かれるようになる。またゆき子は菊治の妻となり、実際的な関わりを持つようになる。

こうした対比的な描写は「言葉」をめぐる記述にもみられる。菊治は、文子の「手紙」を読んだ直後、「言葉は空しいか。」「言葉は、燃やしてしまへ。」（pp.二一五～二一六）と、「言葉」の集合である手紙を前に、「言葉」それ自体の無意味を繰り返している。

そんな菊治とは対照的に、ゆき子は「言葉」によるコミュニケーションを求める。ゆき子は「なにか話してちやうだい。」（p.一七五、p.二三七）と繰り返すなど、菊治に「言葉」を求める。二人は日々の生活の中で会話を重ねていくが、菊治はゆき子の「言葉」の奥にさまざまな憶測をしてしまい、会話を重ねれば重ねるほど、かえってゆき子としっくり融和できない自身の問題に沈潜していく。菊治にとっては〈形〉を求めた結婚だったのに、肉体や言葉といった〈形〉のはっきりしたものではつながり合うことができないのである。

また、菊治は結婚生活を送る中で、"新婚生活の幸福"を自分に言い聞かせ、日常生活の細部に過剰なまでに見出す努力をしている。しかし、菊治が「自分に言い聞かせる」幸福とは「野菜の色」や「ゆき子の寝姿」など、目で見ることのできる〈形〉のはっきりした〈幸福〉ばかりである。はっきりと目に

見える〈幸福〉だからこそ、具体的に取り出して確認し、安心する材料となる。しかし、それは肉体と精神の〈自然〉な融和という〈形〉なき〈幸福〉を感じていないからこそ、現在の「結婚」という〈形〉を正当化するために列挙しているにすぎないのである。

「悔恨」の内実も変容していく。「波千鳥」の冒頭で、菊治は自らの過去を「罪業」「悔恨」(p.一五九)という言葉でゆき子に伝えている。かつては確かに、父から続く太田夫人との関係をそう表現することもあった。しかし「悔恨」の内実は、ゆき子との新婚旅行や結婚生活を挟み、過去の人間関係を悔いるものから、現在の自分のありようを悔いるものへと変化しているのである。(p.一六五)「現世的倫理」において「正常」である〈家族〉の〈形〉は、菊治にとってはもはや〈自然〉を抑圧する「異常な結びつき」として捉えられており、理性でそれを「正常」なものだとするからこそ、そこからの逸脱を異常に恐怖し、ゆき子と結びつくことに必死になるのである。

ここに、〈現実世界〉と〈別の世界〉、〈人為〉と〈自然〉の対比は〈形〉ある〈幸福〉と〈形〉なき〈幸福〉の対比へと展開されているといえる。〈別の世界〉で感じる〈無垢の愛〉の〈幸福〉は、〈形〉によっては捉えられない。菊治に〈無垢の愛〉の〈幸福〉を体験させた太田夫人の描写のありようは、そのことを象徴的に示している。太田夫人が〈別の世界〉に入っていない時、つまり〈現実世界〉にいるときは「年齢の醜さ」(p.六二)が見え、肉体的特徴、つまり「視覚で捉えられる」特徴―「〈形〉ある特徴」―が多く描写されている。しかし、〈別の世界〉における夫人の特徴はそのような「視覚で捉えられる」肉体的特徴よりも、「匂ひ」「温かさ」「触感」など、視覚「以外」の感覚で捉えられる「〈形〉なき」特徴で捉えられている。それは、菊治が「素直」に引き寄せられる「何か」が、「太田夫人」という〈現実世界〉における「枠組み」を取り払ったところにあるからである。

夫人とも文子とも、菊治は〈自然〉に、「抵抗なく」結びつくことができた。それにはなんの現実的思考(=関係を倫理的に捉え返してみること)も伴わなかった(=「なんの考へも浮ばなかつた」(p.三六)。しかし、ゆき子との結びつきの前には、夫婦という「現世」的、〈人為〉的な〈形〉がプレッシャーとなり、どうしても結びつけないことに対して苦しむのである。菊治はこうした経験から、自らの〈自然〉を実現でき、本当の安らぎを感じることができたのは〈形〉なき〈幸福〉のもとにおいてであったことをどこかで自覚していると考えられるのである。

五 『千羽鶴』の意義

「波千鳥」末尾の二篇「春の目」「妻の思ひ」は川端自身によって削除されたものであること、また「波千鳥」の存在すべてを抹消するのでなく、その二篇だけの削除にとどめたということは興味深い。「波千鳥」執筆は川端本人がつよく望んだことであるという点からも、「千羽鶴」だけでは描ききれなかった側面があり、その執筆以前から「波千鳥」によって補完される

べき点が作者によっても多く見出されていた可能性は高い。

ところで第三節で文子の旅の意味を明らかにしたが、菊治はその意味を認識していたのだろうか。菊治は文子からの手紙を受け取ってから一年半近く後、ゆき子との新婚旅行後に手紙を再読してから焼却する。しかし以前文子の手紙を読んだ際と現在と、言葉の受け取り方が彼にとってどのように違ったのかは、読み手には明かされない。しかし決して自分を探すなという手紙の文面とは逆に、菊治は手紙を受け取ってすぐに大分県竹田町に文子を捜索に行き、手紙に書いてあった通り黒織部を「ゆくへしれず」にした。おそらく手紙を受け取った直後には、彼は「菊治と『生による断絶』をし、現世で『生きて』いく」という文子の意志を読み取ることができていなかったと考えられる。しかしゆき子と結婚して新婚旅行に行った後は「手紙」に対し以前とは違った解釈を得たのであろう、文子が促した通り黒織部を売却するのである。菊治にとってはそこに〈形〉を整えるという意味での結婚と新婚旅行の経験が挟まっており、その感慨を以て手紙から受け取る意味が変化していると考えられる。

菊治は「手紙」を受け取った直後には文子の意図を理解していなかったのだから、文子に倣って「自分も文子と断絶し、現世で生きていこう」という自覚をした上での結婚ではなかったと考えられる。ゆき子と結婚した理由は文子の行方を追い求めて得られず、文子を待つ中で、慰めとしてゆき子を再認識したからである。また、正常な〈家族〉という〈形〉を手に入れることで〈幸福〉を手に入れようという意識はもともと菊治にあったものであり、結婚はそれを叶えるものでもあった。しかし、新婚旅行で菊治とゆき子は夫婦の関係を結ぶことができず、彼はその原因を自分が「汚辱と背徳の記憶」（p.一八二）に捉えられているためだとゆき子に説明する。新婚旅行から帰ってきた菊治は、文子が過去の人間関係の〈因縁〉から決別したように、菊治は黒織部（〈因縁〉の人間関係全てを象徴する）を手放すことでそれから決別し、ゆき子との結婚生活に入って行こうとしたのである。

しかし黒織部を手放した後も、やはり菊治はゆき子と肉体でつながることはできない。それは、黒織部に象徴されるような過去の人間関係の〈因縁〉はすでに菊治にとって最大の問題ではなくなっているからである。〈因縁〉のモチーフには黒織部に加え「あざ」も挙げられるが、このことは「あざ」の持ち主である「栗本ちか子の死」を以て、という物語の閉じられ方にも関係してくる。

「妻の思ひ」は、ちか子の死についてのたった四行の事務的な記述で閉じられている。執拗に織部を託してくる当のちか子が死ねば、もうゆき子との結婚生活をおびやかすものは表面的には何もなくなるはずである。しかしそこには、菊治の一言の感想も添えられていない。これは、菊治がすでに解決すべき問題がそこにはないことに気付いている証拠である。最大の問題はゆき子と心身の〈自然〉な融和が図れないことにある。先述したように、〈幕〉は全て「落ちた」のではなく、「結婚」という「現世的倫理」において「正常」とされる〈形〉に姿を変え、常に彼と背中合わせに張り付いているのである。

ゆき子は結婚という「枠組み」を取り払ったら、おそらく

〈自然〉に結び付ける相手ではなかったのである。「春の目」「妻の思ひ」に描かれているのは、過去の〈因縁〉からの囚われよりも、ゆき子と肉体的にも精神的にもしっくりと融和することのできない菊治の苦しみである。もし物語がこの後書き続けられたとしても、問題が夫婦の関係の「不自然」にある以上、菊治とゆき子は堂々めぐりを繰り返し、物語はこれ以上の展開を見ないであろう。

先行研究を概観すると、『千羽鶴』は概ね罪や汚濁の意識からの超脱あるいは浄化の物語と捉えられているようである。しかし文子のいう「母を美しく考える」ことの意味を解釈したとき、「現世的価値観」に基づく「倫理」は相対化され、〈別の世界〉に立って考えれば「破倫」は必ずしも「汚濁」でなくなることが理解される。それが菊治の「頭のなかの幕」を一枚落とし、〈無垢の愛〉が実現できる文子と関係を持ったあと、「幕の外に、菊治は出られ」たことを考えたとき、果たして菊治は「破倫」の〈因縁〉からの「浄化」を心から願っていたかは疑問であり、従来の読みにも考察の余地が出てくると思われる。以上のことから筆者は、『千羽鶴』を人間の作り出した「常識」を脱したところにある人間の〈自然〉の姿―〈現実世界〉の「常識」や「枠組み」を取り払ったところにある人間の姿―を追究した作品だと考える。『千羽鶴』の物語世界は、フィルターの有無によって「捉え返される」世界であり、〈幸福〉を希求する菊治が「現世的価値観」のフィルターを取り払った先にある真の〈幸福〉の姿を認識する過程が描かれている。これにより〈現実世界〉と〈別の世界〉が対比され、〈人為〉と〈自然〉の対比、〈形〉ある〈幸福〉と〈形〉なき〈幸福〉の対比がその延長上に見出される。〈別の世界〉は〈現実世界〉の「枠組み」を取り払った先にある、人間の〈自然〉を実現する世界であり、そこでの〈自然〉な結びつきに、菊治は「温かさ」「あまい安らかさ」といった〈形〉なき〈幸福〉を感じている。しかし、〈現実世界〉ではそのような〈幸福〉を得ることができない。〈形〉なき真の〈幸福〉の「認識」が描かれている「千羽鶴」に対し、「波千鳥」は〈人為〉的〈形〉式による〈幸福〉希求の営みの「挫折」が描かれているのである。

〈現実世界〉の「枠組み」によって必ずしも複雑な人間的現実―人間の〈自然〉―の全てを割り切り、説明することができるとは限らない。しかし全ての人間は〈現実世界〉に生きているため、〈現実世界〉のものさしで物事を捉えざるを得ない。また、〈現実世界〉にいながらにしてその自覚を持つことはさらに難しい。『千羽鶴』は、このように普遍的な世界観に一石を投ずる物語だといえるのである。

以上のことから、本論文では汚濁からの単純な浄化ではなく、一見汚濁と見られるものの中に自らの〈自然〉とその実現による〈幸福〉を見出してしまったことにより、現世的な倫理観と自己の〈幸福〉希求とのはざまでもがき苦しむ主人公像を読み取る。これまでの『千羽鶴』に関する論考では、太田夫人はしばしば「魔性の女」「背徳的な女」と呼ばれている。太田夫人は中年の女であり、本文中で「年齢の醜さが見えた。」(p.六二)などという衰えた肉体的特徴も描写されている。また彼女との関係は父の代から続く「汚濁」の不倫関係である。しかしそうし

た表層の―加齢による容貌の衰えや、倫理的に許されない恋愛などの―醜さを描くことで、却ってその内奥に菊治を引きつけてやまない「何か」の存在が際立たせられているのではないか。一見汚れや醜さと見えるものの中に本当に大切なものを見出す、さらに一歩進めて言えば、"本当に大切なものは清と濁とを単純に振り分けるような価値観を超越したところにある"というテーゼがこの物語には埋め込まれていると考える。

付言すれば、川端は芸術品の持つ「美」にそうした価値観を払拭する力があるとみていたように思う。物語において、志野の水指と湯呑はともに太田夫人を象徴するものである。「名品」である前者の水指は〈別の世界〉における太田夫人の象徴であるのに対し、「それほどよくもない」品物である後者の湯呑は〈現実世界〉における太田夫人の象徴であると考えられる。太田夫人が口紅のあとをしみこませ、菊治に「不潔」を感じさせる志野の湯呑は〈現実世界〉の太田夫人を象徴するのによりふさわしい。しかし湯呑は、菊治の父の持ち物であった唐津の茶碗と並ぶことで、〈別の世界〉における〈無垢の愛〉の美しさをみせるのである。

志野と唐津との二つの茶碗をならべて置いた時、菊治と文子とはふと目が合つた。(中略)

しかし、二つの茶碗は、菊治の父と文子の母との心のやうに、ここにならんでゐる。

三四百年昔の茶碗の姿は健康で、病的な妄想を誘ひはしない。しかし、生命が張りつめてゐて、官能的でさへある。

自分の父と文子の母とを、二つの茶碗に見ると、菊治は美しい魂の姿をならべたやうに思へる。

しかも、茶碗の姿は現実なので茶碗をなかにして向ひ合つてゐる、自分と文子との現実も無垢のやうに思へる。

二人が向ひ合つてゐるのは、おそろしいことかもしれないと、太田夫人の一七日の次の日、菊治は文子に言つたほどだが、今はその罪のおそれも、茶碗の肌にぬぐはれたのだらうか。(pp. 一四四～一四五)

唐津を菊治の父の象徴とするなら、志野の湯呑はそれと並んで初めて〈現実世界〉の「不潔」が消え失せ、〈別の世界〉で実現する〈無垢の愛〉の美しさを象徴するものになったと考えられる。二つの茶碗が並ぶことによって、〈別の世界〉が生まれたのである。「病的な妄想」は〈現実世界〉の「枠組み」に照らし合わせるからこそ出現するもので、〈別の世界〉ではその〈無垢の愛〉はむしろ「健康」で「生命が張りつめてゐて」「美しい」ものなのである。そして、そもそもは互いの親の不倫関係から生じた、菊治と文子との二人が心を通わせている「現実」も、〈別の世界〉における愛のように「無垢」なものに思われるのである。親子二代に亘る破倫の〈因縁〉という「おそろしいこと」や、〈現実世界〉の「枠組み」と対照したときに見えてくる「罪のおそれ」も、二つの茶碗の持つ「美」によって「ぬぐはれた」。二つの茶碗は〈別の世界〉における〈無垢の愛〉の美しい姿を菊治たちに見せ、〈現実世界〉の価値観を払拭したのである。

一　月村麗子「『千羽鶴』とその続編「波千鳥」について―主題〝縁〟の展開をめぐって―」（『国文学　解釈と鑑賞』一九六九年九月号、pp.一二六～一二七）

二　川嶋至「美への耽溺―『千羽鶴』から『眠れる美女』まで―」（『川端康成の世界』講談社、一九六九年一〇月）、高田瑞穂「千羽鶴」（『川端康成作品研究』（近代文学研究双書）、八木書店、一九六三年三月）など。

三　上坂信男「『千羽鶴』と『山の音』」（『川端康成―その『源氏物語』体験―』右文書院、一九八六年一月）、上坂信男『千羽鶴』（『国文学　解釈と鑑賞』第六二巻四号、一九九七年四月、pp.一〇三～一〇四）

四　原善「『千羽鶴』論」（『川端康成の魔界』有精堂出版、一九八七年四月）

五　同四、pp.四四～七九より作成。

六　北村倫子「川端康成『千羽鶴』論―〈女のかなしみ〉をめぐって―」（『昭和文学研究』第三一集、一九九五年七月、pp.六一～六二）

（平成二十二年度修了）